

日田市埋蔵文化財調査報告書第26集

# 山ノ口遺跡

2000年

日田市教育委員会

## 例 言

1. 本書は(株)朝日木工より委託を受けた山田用地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査にあたっては、事業者である株式会社朝日木工代表取締役小埜澄夫氏や(株)川浪組齊藤英之氏には全面的なご協力をいただいた。また、宝積寺には、調査の際に駐車場の便宜を図っていただいた。記して感謝申し上げます。
3. 本書に掲載した写真のうち、個別の遺物写真撮影は(有)雅企画長谷川正美氏の委託によるものを使用した。
4. 上記以外の遺構写真および、遺構・遺物の実測は行時・若杉が行い、遺物のトレースについては(有)雅企画財津香奈子氏の委託によるものを使用した。
5. 遺跡からの出土遺物、および実測図・写真についてはすべて日田市埋蔵文化財センターに保管している。
6. 本書の執筆・編集は行時・若杉が協議の上、行時が行った。

## 本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査組織の構成	2
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	
1. 調査の経過	3
2. 調査の内容	3
IV. まとめ	6

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)	第5図 縄文土器実測図 (1/3)
第2図 調査区位置図 (1/5,000)	第6図 石器実測図 (1/3) (2/3)
第3図 山ノ口遺跡全体図 (1/300)	第7図 1号土坑実測図 (1/30)
第4図 調査区北側壁面土層柱状図	第8図 中・近世遺物実測図 (1/3)

## 図版目次

写真1 発掘調査作業風景
写真2 調査区北側壁面土層
図版1 (上) 遺跡全景 (北方向より)
(中) 遺跡全景 (東方向より)
(下) 1号土坑 (北方向より)
図版2 遺跡出土遺物



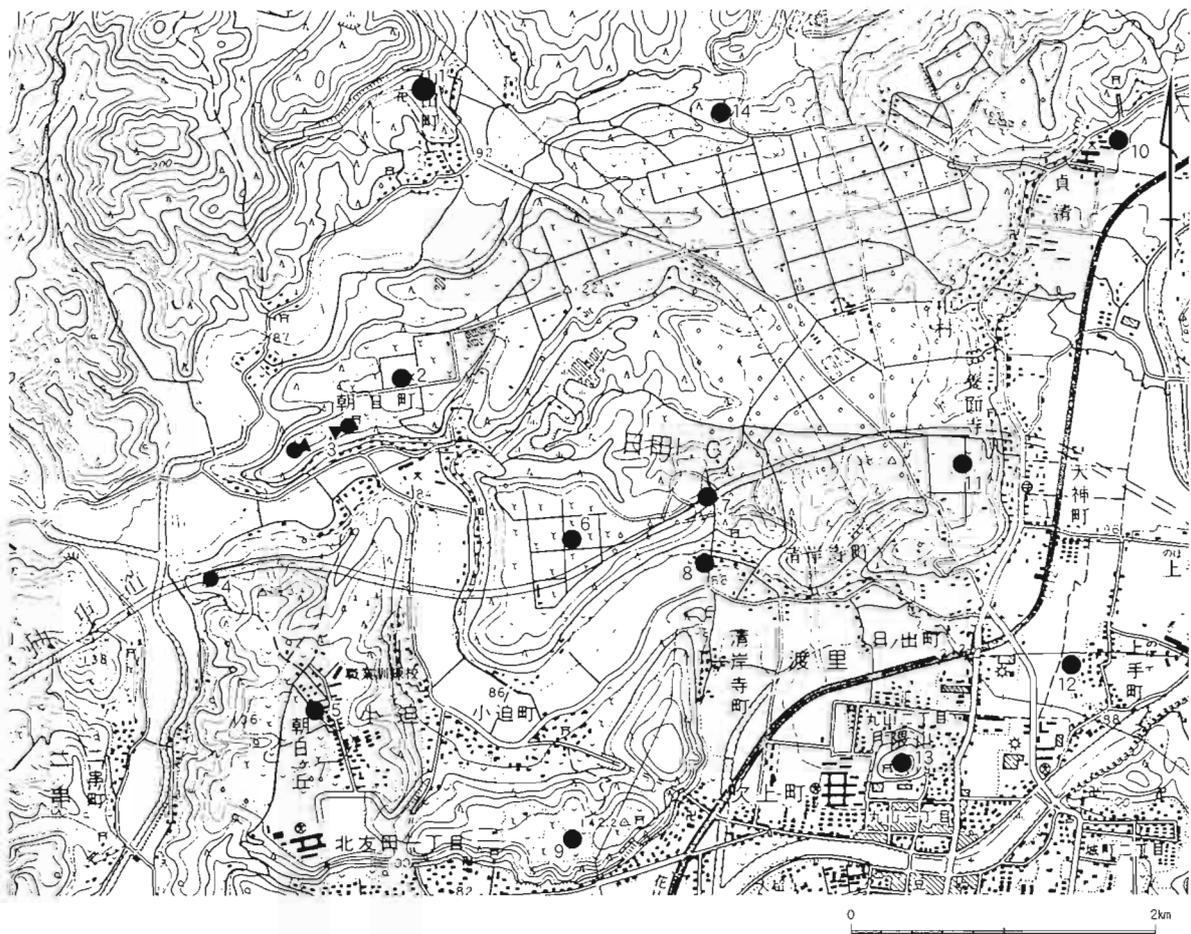
写真1 発掘調査作業風景

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

平成11年5月21日付けで株式会社朝日木工より、日田市大字山田字山ノ口998-1番地ほかに資材置場などを目的とした造成工事を計画する趣旨の照会文が日田市教育委員会に提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地には該当していなかったが、谷を挟んで向かい側の台地上には朝日宮ノ原遺跡が、また谷筋を上った場所には谷ノ久保遺跡などの周知遺跡が存在しており、遺跡の存在する可能性が高かったことから、事業者の協力を得た上で、機械による試掘調査を平成11年6月22日に実施した。

試掘調査の結果では、縄文または弥生時代と判断される多数の柱穴や溝が検出され、遺構は開発予定地全体にわたって存在する可能性が高いことが明らかとなったため、その後遺跡の取扱いについて事業者と再度協議を行った。協議では、開発予定地の半分近くが切土となり、低い部分にその土を盛って造成する計画であることから遺構の保護は難しいため、発掘調査はやむを得ないとの結論に達した。このことから、平成11年11月11日に委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。



- |          |             |                  |           |           |
|----------|-------------|------------------|-----------|-----------|
| 1 山ノ口遺跡  | 2 朝日宮ノ原遺跡   | 3 天満古墳群          | 4 小迫墳墓群   | 5 朝日ヶ丘遺跡  |
| 6 小迫辻原遺跡 | 7 草場第2遺跡    | 8 本村遺跡           | 9 吹上遺跡    | 10 三和教田遺跡 |
| 11 後迫遺跡  | 12 日田条型上手地区 | 13 丸山城跡 (月隈横穴墓群) | 14 谷ノ久保遺跡 |           |

第1図 遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/25,000)

### 3. 調査組織

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤正俊（日田市教育長）

調査事務 原田俊隆（文化課課長）石井英信（同課長補佐）佐々木豊文（同主査）

美野寿美香（同臨時職員）～平成12年3月 江田香織（同臨時職員）平成12年4月～

調査員 土居和幸（文化課主任）～平成12年3月 行時志郎（同主任）若杉竜太（同主事）

調査作業員 中尾タマエ、安達義男、安達アサ子、吉田ルリ子、安達ツヤ子、江藤勝義

穂本文雄、高村笑美子、手嶋トシエ、秋吉ミユキ、猪熊ヨネ、行村シズエ

整理作業員 伊藤弘子

## I 遺跡の立地と環境

山ノ口遺跡は、日田市北部の沖積地を見下ろす丘陵に挟まれた小谷の最高所に位置する。沖積地では、山間より流れ出る水を利用した水田が営まれ、また丘陵上には杉林が広がっており、昔ながらの静かな農村のたたずまいをみせている。遺跡のすぐ西側には、天文年間に製作された木造大日如来座像や木造毘沙門天立像などが安置されている宝積寺があり、霊験あらたかなお寺として参拝に訪れる人々が後を絶たない。お寺の周囲には、近世から近代にかけての墓地群が広がっている。一方沖積地を挟んで南側には通称山田原、宮ノ原と呼ばれる開けた台地が展開している。これらの市街地に近い台地上では、農地土壌改良に伴う天地返しや大分自動車道建設などの事業が進められ、朝日宮ノ原遺跡や後迫遺跡、小迫辻原遺跡などの日田市を代表する遺跡もそれに伴って発掘調査が行われている。朝日宮ノ原遺跡

では弥生時代の竪穴住居跡をはじめとする多数の遺構が発見されたほか、中国の輸入陶磁器類や鏡を副葬した中世の木棺墓なども検出されている。この台地の南端には、日州市内最大の前方後円墳である天満古墳群も存在している。小迫辻原遺跡では国内最古となる古墳時代前期の方形環溝居館などが発見され、平成8年度には国史跡の指定を受けている。

#### 参考文献

友岡繁彦・土居和幸『日田市朝日宮ノ原遺跡の中世土葬墓』

【おいた考古2号】大分県考古学会 1989

田中裕介編『小迫辻原遺跡Ⅰ』大分県教育委員会 1999

土居和幸編『小迫辻原遺跡』日田市教育委員会 1993



第2図 調査区位置図（1/5,000）

### Ⅲ 調査の内容

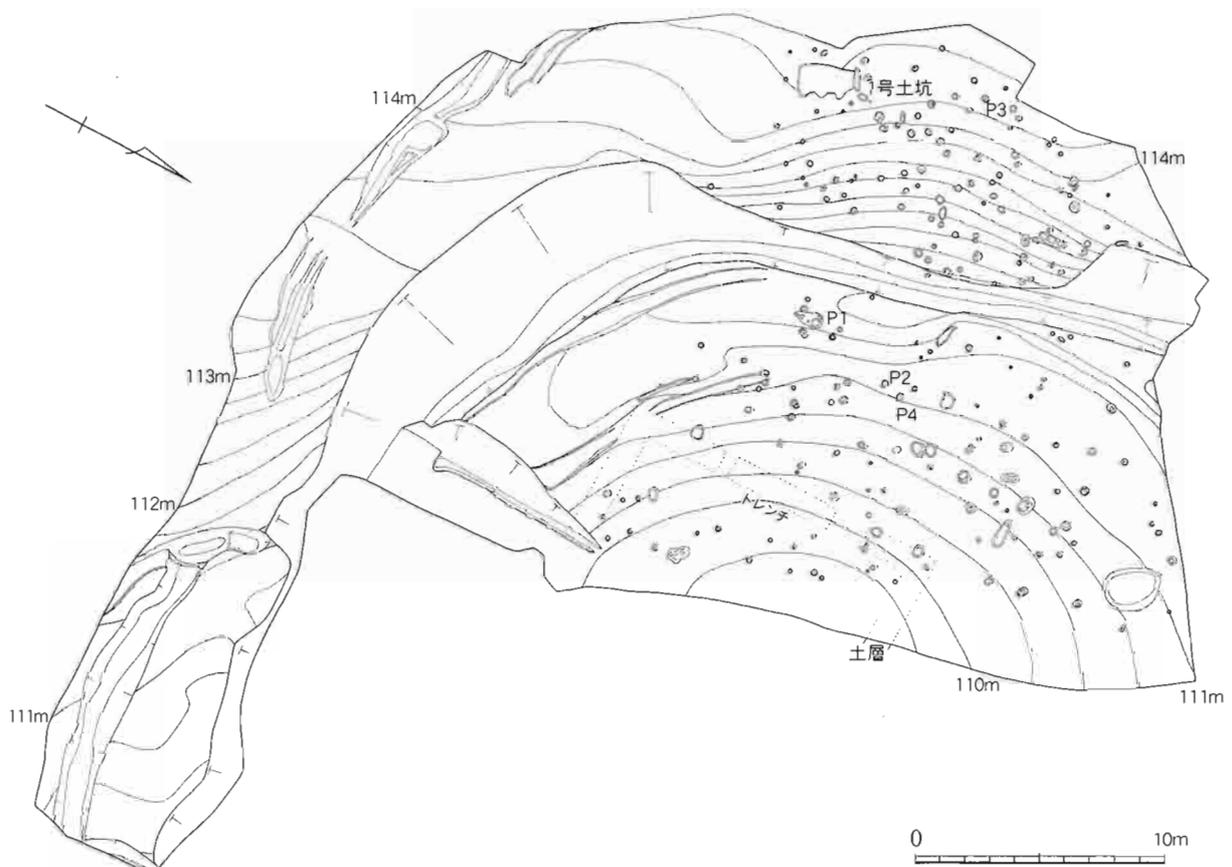
#### 1. 調査の経過

調査区は丘陵より半円形に落ちる谷部にあり、切土となる南側の一段高い位置より表土除去作業を進めていった。この部分は丘陵より数メートルの段差があり、表土を取り除くと凝灰岩の岩盤が見られ、近年に削平され畑として利用されていたものと考えられる。その部分からは数条の畑の排水溝が検出された。続いて西側へ移っていったが、頂部より西側にかけての地山は、黄褐色のローム面が続き、そこでは土坑や多数の柱穴が検出され浅い谷部を形成していた。この谷部は、斜面下側にかけてさらに広がっており、そこでも同様に多数の柱穴跡が確認された。表土除去の後、まず高い位置より柱穴の掘り下げを進め、順次低い位置へと移っていった。全体の掘り下げが完了した後は、全体測量及び個別実測図の作成、写真撮影を行った。

なお調査期間は、発掘調査作業を平成11年11月18日から同12月15日まで、また整理作業を平成12年6月1日から同30日まで実施した。

#### 2. 調査の内容

調査区内で検出された遺構は、土坑1基、溝跡6条、柱穴多数であるが、それらの遺構の埋土は、暗灰色と黒褐色の概ね2つの色調に区分された。暗灰色のものは土坑も含め、ほとんどが高い位置で検出された。第4図は最下部の土層の堆積状況であるが、2層目が暗灰色の層で、中世の瓦質土器や土師質土器が含まれ、3層目は黒褐色の層で、縄文時代晩期の土器が含まれていた。これらの



第3図 山ノ口遺跡全体図 (1/300)

土層と遺構の埋土が一致すると考えれば、暗灰色のものは少なくとも中世以降の遺構と考えられる。また、黒褐色の柱穴はいくつか堀方などしっかりし、並んでいるものも見受けられたが、建物として構成するには至らなかった。これらの遺構の中からも、縄文時代晩期の土器などが出土しているが、この黒褐色土より下の暗褐色土の層（4層）からも縄文時代晩期の土器や石器が出土しており、それらの遺構はそれ以降の遺構と考えられる。

また、4層にトレンチを設定し、その下の遺構の確認を試みたが、20cm程度掘り下げた所で暗褐色の硬くしまった層（5層）が検出されたものの遺構はその面では確認できなかった。このことから4層は縄文時代の遺物包含層として判断した。

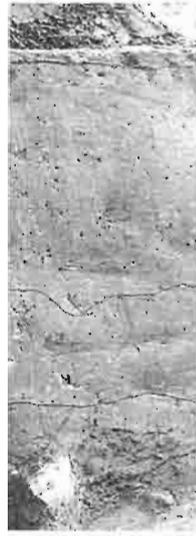
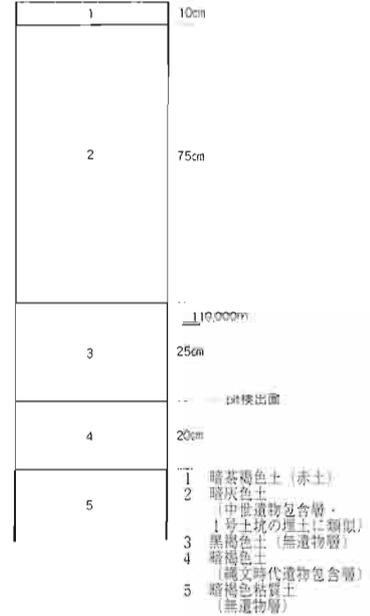
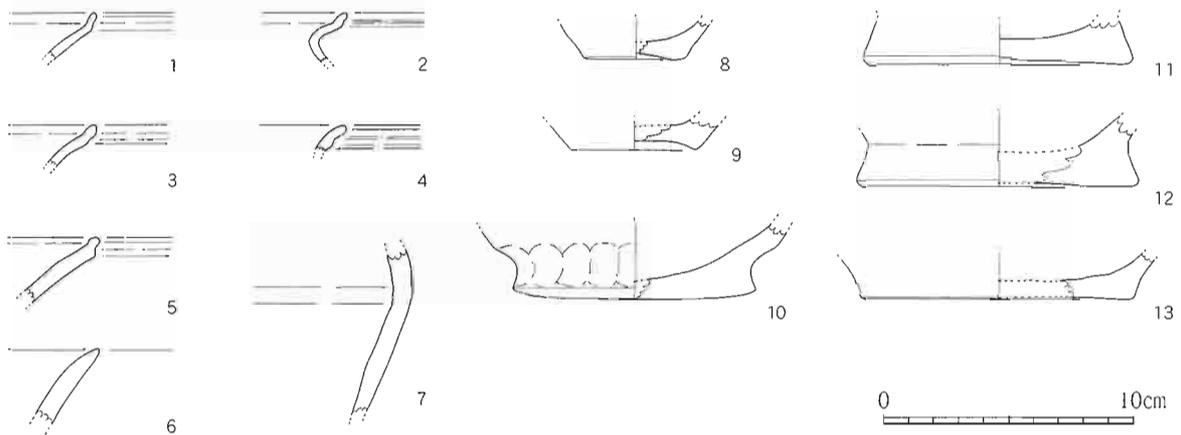


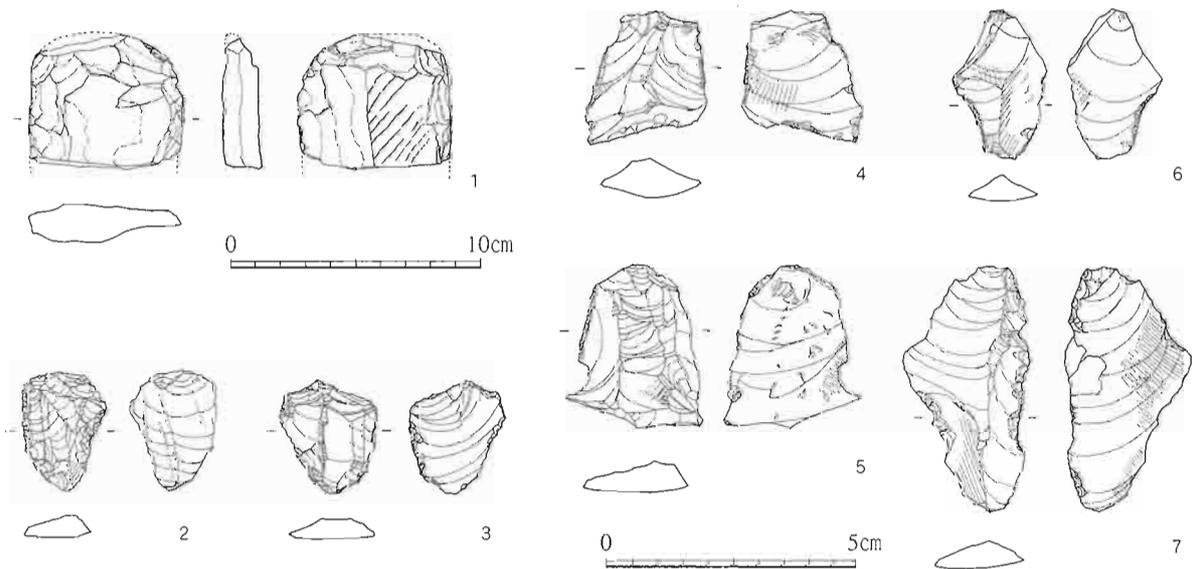
写真2 調査区北側壁面土層



第4図 調査区北側壁面土層柱状図



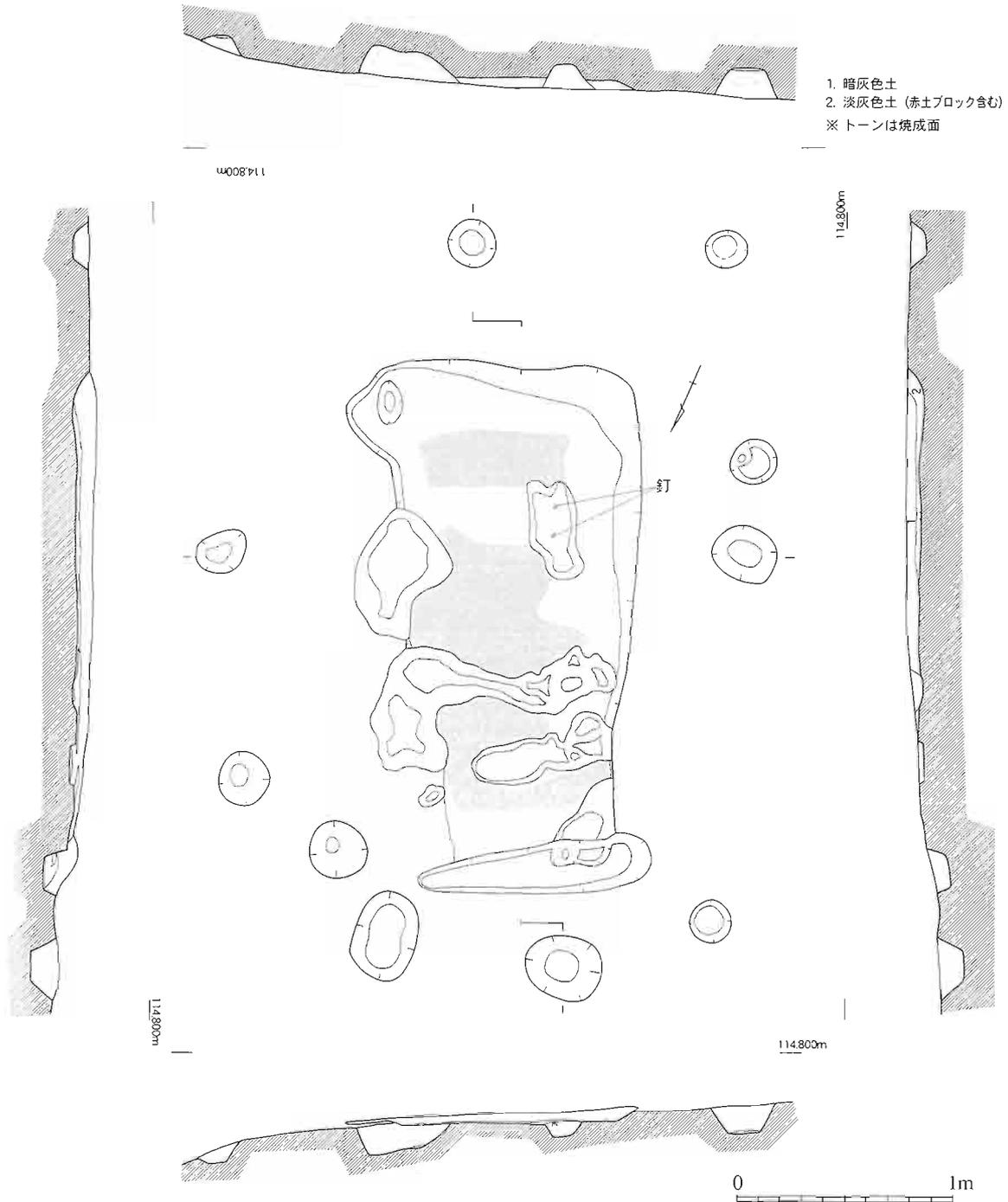
第5図 縄文土器実測図 (1/3)



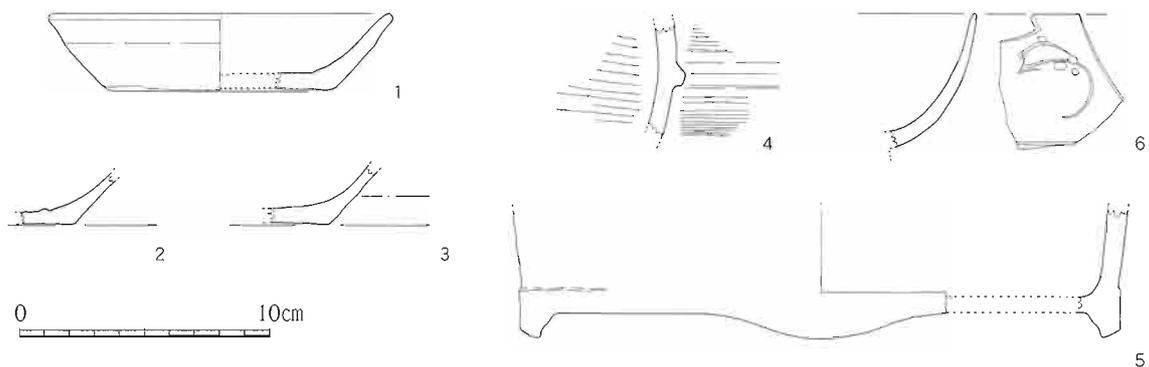
第6図 石器実測図 (1/3) (2/3)

包含層等出土土器①（第5図）

1はP 1、3・6はP 2、13はP 3でその他は4層出土の遺物である。1～5は浅鉢口縁部である。色調は暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。口縁部は外反し、外側に1条の沈線を巡らせる。端部はいずれも丸く仕上げている。6・7は深鉢で、6は口縁部、7は胴部ある。色調は暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。7は屈曲部で、屈折はせず、緩やかに曲がる。8～13は底部である。色調は暗褐色を呈し、砂粒を多く含む。10はややレンズ底となり、外面指頭圧痕が顕著に見られる。それ以外は上げ底となり、11・12は底端部が外に張り出すタイプである。



第7図 1号土坑実測図 (1/30)



第8図 中世遺物実測図 (1/3)

#### 包含層等出土石器 (第6図)

3は溝、6はP4、その他は4層出土の遺物である。1は打製石斧である。下半を欠損する。残存長5.4cm、幅6.2cmを測る。2は「つまみ型」石器である。長さ2.4cm、最大幅1.7cmを測る。3～7は2次加工剥片である。3は長さ2.3cm、最大幅2.0cm、4は長さ2.6cm、最大幅2.4cm、5は長さ3.3cm、最大幅2.6cm、6は長さ3.0cm、最大幅1.8cm、7は長さ4.9cm、最大幅2.5cmを測る。

#### 1号土坑 (第7図)

調査区南部で検出された。長軸2.4m、短軸1.1m、深さは約5cmで上部をかなり削平されていると推測される。埋土は暗灰色で、床面は焼成を受け赤変していた。木根により攪乱が著しかったが、その中からこの土坑に伴うと見られる鉄釘が2点出土したが、調査中に紛出した。この土坑の周囲には、これを囲むように柱穴列が見られ、何らかの構造物があったものと考えられる。土坑の中からは土器等は出土しなかった。

#### 包含層等出土土器② (第8図)

1～3は土師質土器である。1は口径13.7cm、底型8.6cm、器高3.1cmを測る。口縁部はやや外反気味に延びる。底部には糸切り痕が残る。4・5は瓦質土器である。4は羽釜の胴部である。内外面にハケが残る。5は火鉢の底である。断面蒲鉾状の脚部が取り付けく。6は染付椀である。外面花文のような図柄が見られる。

## IV まとめ

山ノ口遺跡では、縄文時代と中世の大きく2つの時期の遺構が存在していることが明らかとなった。主に縄文時代の包含層から出土した土器はいずれも暗褐色に焼成を受け、砂粒の多い粗製の土器で、晩期でも新しい段階の遺物と考えられる。調査区は谷部の最も高い位置にあるため、谷筋に降りていくに従い、同時期の集落の存在する可能性が伺えた。

また、中世の遺物は土師質土器の特徴から15世紀後半以降の中世後期の所産と考えられ、瓦質土器などもほぼその時期と見られる。1号土坑は、遺物はないものの埋土からその時期と判断され、その用途が問題であるが、隣接する宝積寺に安置されている仏像群が創建時のものと推測し、調査区南側には近世墓地群が隣接することを加味すると、その寺の墓所に関連した施設であった可能性が高いと考えられる。

遺跡全景（北方向より）



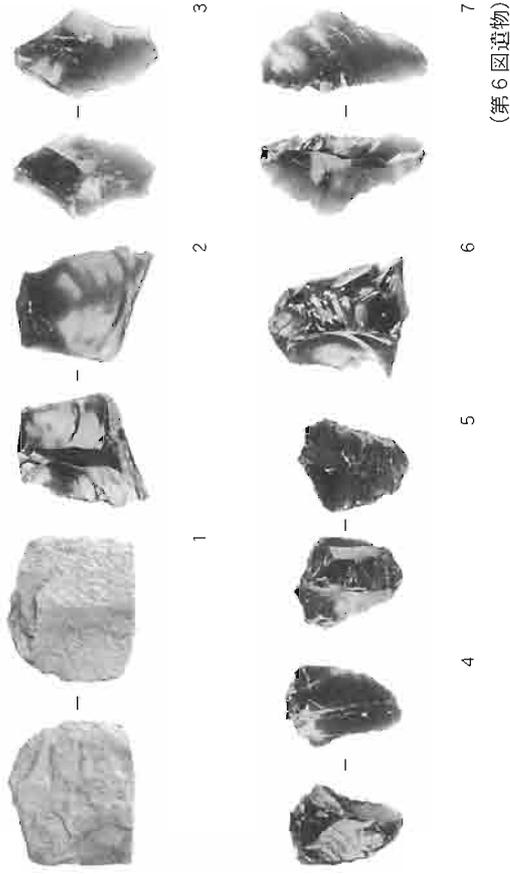
遺跡全景（東方向より）



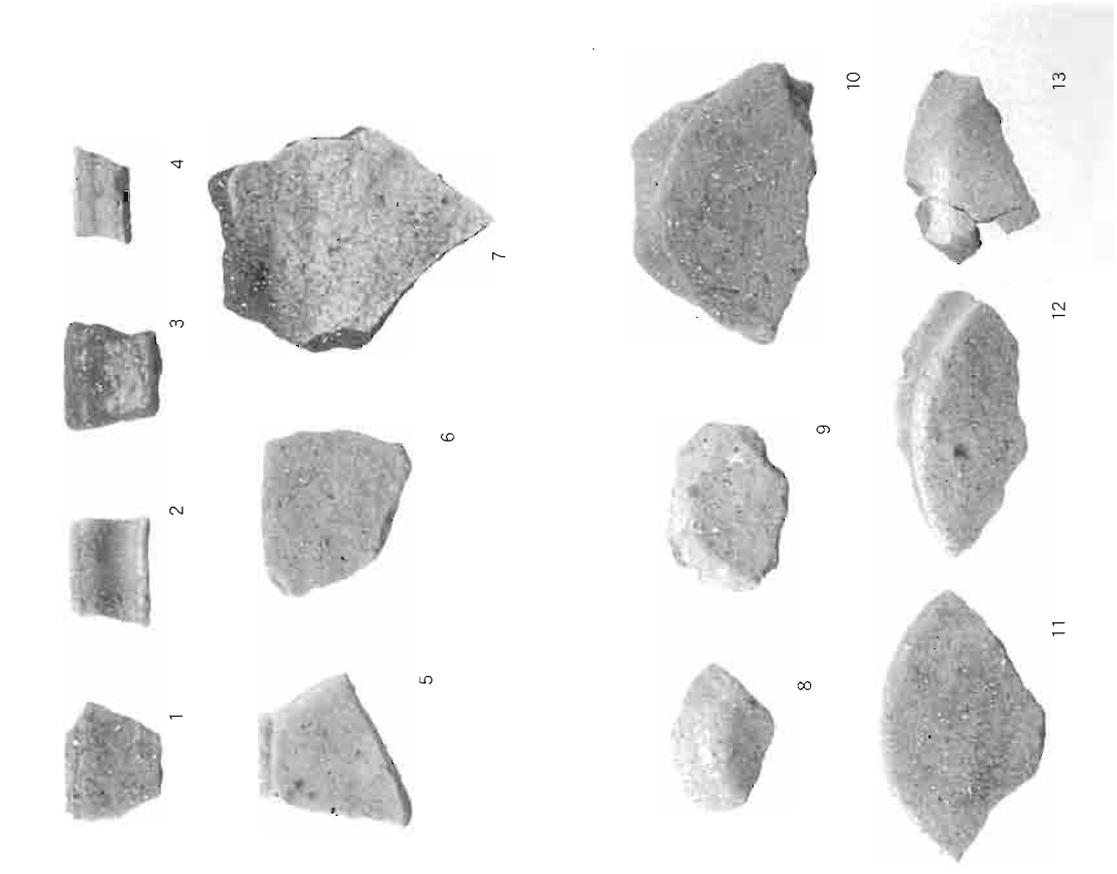
1号土坑（北方向より）



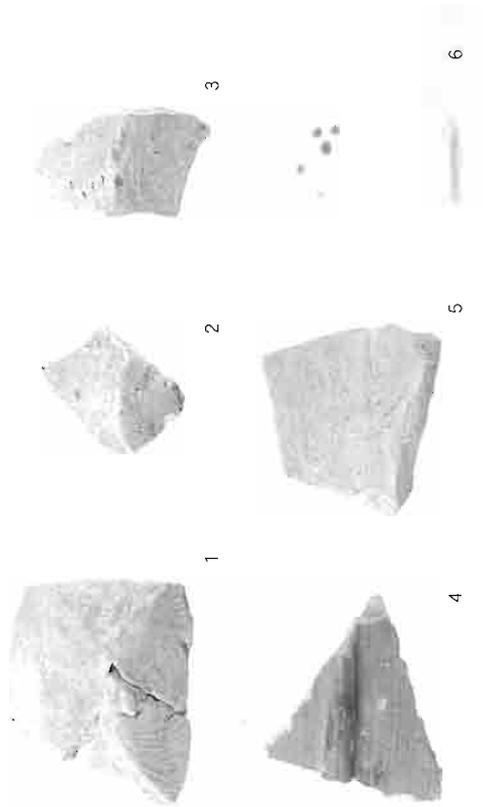
遺跡出土遺物



(第6図遺物)



(第5図遺物)



(第8図遺物)

# 報告書抄録

フリガナ	ヤマノクチイセキ							
書名	山ノ口遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	行時志郎・若杉竜太							
編集機関	日田市教育委員会 (0973) 22-8232							
所在地	〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1							
発行年月日	西暦2000年9月29日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ヤマノクチ 山ノ口 イセキ 遺跡	ヒタシオオアザヤマダ 日田市大字山田 アザ 字山ノ口					19991118 ~19991215	840m <sup>2</sup>	山田用地 造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
山ノ口		縄文 中世	包含層 柱穴 土坑	1基	縄文土器・石器 土師質土器 瓦質土器			

## 山ノ口遺跡

— 日田市埋蔵文化財調査報告書第26集 —

平成12年9月29日

発行 日田市教育委員会  
大分県日田市田島2丁目6-1

印刷 日田時報紙器印刷(株)  
大分県日田市二串町345-3

